

禁句

川崎ゆきお

面接が終わった。

合格者はほぼ決まっていた。

社員を減らし過ぎ、社内の雰囲気が悪くなっていた。

「どう思うかね？」

専務が人事課長に聞く。

「もう決定では...」

「あの五人でいいのかね」

「蒔田政勝は駄目でしょ。ですから、この五人で」

「だから、どう思うと聞いているんだがね」

「では採用は六人で...」

「一人でも多いほうがいいと思うがね」

「専務がそうおっしゃるのなら...」

「不服かね？」

「お知り合いですか？」

「そうじゃない」

「専務もご覧になりましたでしょ。社員になりたいだけの若者です」

「間違っていない」

「ええ、ですから、その上で何ができるとか、どういうことをやりたいとか...」

「だからね、そういう嘘は聞き飽きたんだよ。あの男にはその演技がない」

「だから、他の役員もハネタのですよ。嘘でもいいからやる気のある人に入ってもらわないと...」

」

「そうなんだがね」

「では、採用は五人ということで...」

「五人で足りるの？」

「今よりはましでしょう」

専務は蒔田政勝の連絡先をメモした。

そして数日後、個人的に会った。

「君はどうして面接であんな応え方をしたのかね。これは私が個人的に知りただけで他意はない。興味本位だ。面接用のマニュアルがあるだろ」

「はい」

「あれでは不採用になることぐらい分かっているはずだ」

「思っているままを話しただけです」

「社員になり、安定した収入を得たいのはみんな同じだ。それを得るには、採用されるような演技も必要なんだ。仕事とはそういうものなんだ」

「あれも演技です」

「どういうことかね？」

「就職活動をしていればいいのです」

「じゃあ、採用されまいと思いながら来たのかね」

「働きたくない。これが本音です」

専務は黙った。常日頃思っているとも言ってはならない禁句だった。